

青年期の友人関係のルール認知タイプと個人志向性・社会志向性との関連

畠 山 寛

Hiroshi HATAKEYAMA :

The Relationship between Types of Friendship Rules and Individual, Social-Orientedness.

本研究の目的は、青年期の友人関係のルール認知タイプと個人志向性、及び、社会志向性との関連を検討することである。その結果、個人志向性P得点と社会志向性P得点において、ルール認知タイプの効果がみられた。個人志向性P得点では基本的タイプの方が一方的タイプよりも高く、基本的タイプの個別化・個性化が示された。また、社会志向性P得点では気遣いタイプと基本的タイプが一方的タイプよりも得点が高く、社会適応や関係性の考慮が高いことが示された。

キーワード：友人関係のルール 個人志向性 社会志向性 青年期

1. 問 題

青年期の自己発達の過程は「家族への依存から脱却して幼児的な対象との結びつきを緩め、より大きい社会の一員となる¹⁾」というように、心理的に親から離乳²⁾し、依存的な人間関係から一人の独立した自己を形成する過程であると考えられる。この過程において自己は不安定な状態であり、他者との分離と融合の間で適切な心理的距離をおいた親密な関係を持つことが難しく、他者からの孤立、あるいは、他者からの呑み込まれといった危険を抱えていることが指摘されている³⁾。

このような自己の発達に関して、伊藤は志向性という概念を用いて検討している⁴⁾。志向性には個人志向性と社会志向性の2つの志向性がある。個人志向性とは「自立や個別化に向かいつつ個性を尊重し主体的に行動する特性」を意味し、社会志向性とは「他者や社会との関係性に意識が向かい他者との共存や社会適応を志向する傾向」と定義される。この2つの志向性は加齢とともに高まり、個人化と社会

化という2つの経路を統合的にたどることで発達していくことが示唆されている。

また、この志向性の概念には肯定的側面と否定的側面があると仮定される⁵⁾。志向性の肯定的側面とは先ほどの定義に示されるように、個人志向性では個性を尊重し主体的に行動する特性をもち、社会志向性では社会適応を志向することを示すが、一方で否定的側面とは、個人志向性では極度な個人主義やエゴイズムなどからくる利己性や自己愛的な性格を呈し、社会志向性では主体性や能動性が低く、他者への一方的な依存や従属を示すと考えられている。

このことから自己発達の過程は、個人として自律したり主体性を獲得したりすると同時に、よりよい社会の一員として適応していく過程であると考えられるが、一方では望ましくない自己の発達の過程が存在するとも言える。

ところで、青年期の自己の発達において重要となる存在に友人関係が挙げられる。同年代の友人は、家族への依存を低下させるきっかけになるとともに、自己の安定化や他者との距離のとり方などを学ぶことができる存在である⁶⁾。また、友人との関わ

りを通して自己と他者の違いに気づき個別化も促されると考えられる。このことから青年期の自己の発達、友人との関わり方と密接な関係があると考えられる。

友人との関わり方に関する研究では、自己防衛的な関わりから特定の相手に心を打ちあけていくといった発達の変化⁷⁾や、同年代における友人関係にも異なる様式が存在すること⁸⁾⁹⁾が明らかにされている。このことから友人との関わり方は一様なものではないと言える。

以上のことから、友人との関わり方が異なるのであれば、友人との関わり方と密接に関連すると考えられる青年期の自己発達、つまり、個人志向性や社会志向性の程度も異なると考えられる。このことから本研究では、友人との関わり方と個人志向性・社会志向性との関連について明らかにすることを目的とする。

ところで、友人との関わり方については、畠山によってルール認知の観点から検討することの有効性が確認されている¹⁰⁾。そこで本研究では、友人関係をルールの観点から捉え、友人関係のルール認知タイプと個人志向性、及び、社会志向性との関連を検討することを目的とする。

2. 方 法

(1) 被調査者 広島県内の私立大学生で、心理学の講義を受講している女子大学生167名である。

(2) 調査用紙の構成 調査用紙には次の調査項目、および、尺度を載せた。

① 友人関係のルールに関する項目 Argyle & Hendersonの43のルール項目を使用した¹¹⁾。これらの項目に対する回答は「すべきであると非常に思う：9」から「すべきではないと非常に思う：1」までの「どちらでもない：5」を中点とする9件法で求めた。

② 志向性に関する尺度 伊藤によって作成され

た個人志向性PN尺度、および、社会志向性PN尺度を使用した。P尺度は個人志向性、社会志向性の肯定的側面を測定する尺度であり、N尺度は個人志向性、社会志向性の否定的側面を測定する尺度である。それぞれの尺度の項目数は個人志向性P尺度が8項目、社会志向性P尺度が9項目、個人志向性N尺度は6項目、社会志向性N尺度は7項目である。本研究では、それぞれの項目に対して、「あてはまる：5」から「あてはまらない：1」まで、「どちらでもない：3」を中点とする5件法で回答を求めた。

3. 結 果

(1) ルール項目の因子分析

43のルール項目がどのような因子に分けられるのかを明らかにするために、まずはじめに主成分分析を行った。因子数は固有値の推移、因子の解釈可能性を考慮して決定した。そして、因子負荷量.40以下の項目を除外し、再度、主成分分析をおこないプロマックス回転をかけた。因子分析の結果をTable 1に示す。負荷量.40以上の項目を因子として採用した。なお、複数の因子に採用される項目もそれぞれの因子の項目として採用した。

第1因子は項目38「お互いに誠実である」、項目33「相手の精神的な支えになる」、項目42「相手の人間関係を妬んだり批判したりしない」など計11項目で構成され、誠実さやサポートなど友人関係において基本的な行動を示す因子であると考えられるため、基本的な友人行動因子（以下、基本的友人）とする。

第2因子は項目09「相手の前では自分の怒りを表さない」、項目10「相手の前では心配事や不安を表さない」、項目25「相手には最も良い自分の姿を見せるように努力する」など計8項目で構成され、友人に対する自己の行動を監視する行動を示す項目で構成されているため、自己呈示因子（以下、自己呈示）とする。

Table 1 友人関係のルール項目の因子分析結果 (プロマックス回転後)

ルール内容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
項目38 お互いに誠実である	0.689	0.057	-0.088	0.025
項目33 相手の精神的な支えになる	0.634	-0.178	-0.022	0.161
項目42 相手の人間関係を妬んだり批判したりしない	0.612	0.063	-0.112	-0.046
項目37 人前でお互いに批判しない	0.61	0.256	0.159	-0.164
項目31 相手のプライバシーを尊重する	0.562	0.003	0.05	-0.032
項目40 お互いに信用し、信頼しあう	0.558	-0.165	0.04	0.237
項目18 相手がいないところでは、相手を弁護する	0.531	0.089	-0.112	-0.206
項目28 相手にはいつも暖かい思いやりを示す	0.501	0.107	0.098	0.257
項目35 相手が病気の時には世話をする	0.462	-0.127	-0.102	0.290
項目09 相手の前では自分の怒りを表さない	-0.019	0.751	-0.211	-0.035
項目10 相手の前では心配事や不安を表さない	-0.125	0.721	-0.190	0.175
項目25 相手には最もよい自分の姿を見せるように努力する	0.091	0.670	0.116	0.056
項目24 相手と一緒にいるときはきちんとした小奇麗な服装をする	0.145	0.592	0.203	-0.041
項目06 相手と一緒にいるときは、下品な言葉遣いをしない	0.141	0.548	0.386	0.078
項目34 相手に対してうさく文句を言わない	0.434	0.512	-0.068	-0.196
項目08 セックスや死の問題について相手と話さない	-0.185	0.433	0.284	-0.012
項目02 相手には自分の気持ちや個人的な問題を打ち明けない	-0.346	0.423	-0.082	0.286
項目01 相手を姓ではなく、名前で呼ぶ	0.081	0.147	-0.629	0.160
項目23 相手には冗談を言ったり、からかったりしない	0.041	0.330	0.625	-0.002
項目21 家族の祝いの時には、相手を招待して一緒に食事をする	0.234	-0.052	0.508	0.279
項目04 相手に誕生カードやプレゼントを贈る	0.382	0.106	-0.449	0.064
項目14 相手の体にわざと触らない	-0.161	0.275	0.442	-0.161
項目03 一緒に食事をするときなど、相手分の支払いを申し出る	-0.026	0.091	-0.146	0.697
項目29 相手には自分の個人的なスケジュールを知らせる	0.101	-0.272	0.168	0.645
項目11 相手の指示には従う	0.075	0.328	-0.256	0.563
項目26 遠慮しないで相手の時間を、自分が望むように取る	-0.408	0.193	0.126	0.480

第3因子は項目01「相手を姓ではなく、名前で呼ぶ(反転)」, 項目23「相手には冗談を言ったり, からかったりしない」, 項目21「家族の祝いの時には, 相手を招待して一緒に食事をする」など計5項目で構成され, 親しい友人に対する行動を示すよりも形式的な関わりを示す項目で構成されているため形式的因子(以下, 形式)とする。

第4因子は項目03「一緒に食事をするときなど, 相手分の支払いを申し出る」, 項目29「相手には自分の個人的なスケジュールを知らせる」, 項目11「相手の指示には従う」など計4項目で構成され, 友人に対して自分を受容させるような行動を促すことを示していると考えられるので受容因子(以下, 受容)とする。

それぞれの因子を尺度として使用するためにクロ

ンバックの α 係数を求めた。基本的友人尺度は.75, 自己呈示尺度は.75, 形式尺度は.69, 受容尺度は.68であり, どの尺度もある程度の信頼性が認められたためこれらの尺度を使用する。

(2) ルール認知のクラスター分析

基本的友人尺度, 自己呈示尺度, 形式尺度, 受容尺度の標準得点を使用し, 友人関係のルール認知に対してどのようなタイプが存在するのかを明らかにするためにクラスター分析(K-means法)を行った。クラスターの解釈可能性を考慮し3つのクラスターを採用した。クラスターのプロフィールをFig 1に示す。

クラスター1は, 基本的友人が平均よりやや高く, 自己呈示と形式の2つが高い。そして, 受容は

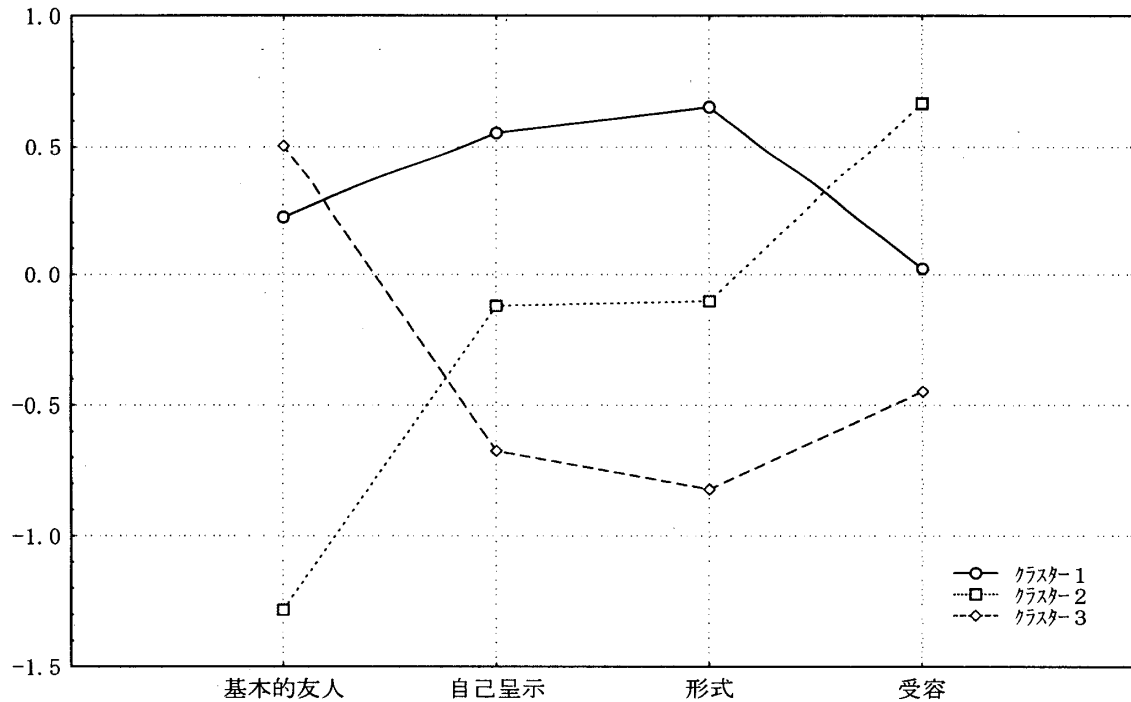


Fig. 1 ルール認知タイプの各尺度の標準得点平均

平均的である。このことからクラスター1のルール認知は友人に対し基本的な関わり方を重視しながらも、自分をよく見せる行動や形式的な行動、そして、友人に不快な思いをさせないといったことを重視するといった気遣いルール認知のタイプ（以下、気遣いタイプ）であると考えられる。

クラスター2は、基本的友人が非常に低く、自己呈示と形式は平均的であるが、受容が高い。このことからクラスター2は友人に受け入れてもらおうとすることを重視するものの、基本的な友人に対する行動を重視しないと考えられる。そのため、どちらかという友人に対して一方的に関わることを重視するルール認知のタイプ（以下、一方的タイプ）であると考えられる。

クラスター3は、基本的友人が高く、自己呈示と形式が低く、受容も平均よりも低い。このことから友人として基本的な関わり方を重視し、自己呈示や形式、および、受容が低い素の自己を表出することを重視するルール認知のタイプ（以下、基本的タイプ）であると考えられる。

(3) ルール認知タイプによる個人志向性PN尺度得点、社会志向性PN尺度得点の分散分析

ルール認知タイプによって、個人志向性PN尺度得点、及び、社会志向性PN尺度得点の得点が変わるかを検討するために、ルール認知タイプを独立変数とした一要因（3水準）の分散分析を行った。各ルール認知タイプのそれぞれの尺度得点をTable 2に示す。

分散分析の結果、個人志向性P尺度得点 ($F(2, 164) = 3.76, p < .05$)、社会志向性P尺度得点 ($F(2, 164) = 8.93, p < .01$) においてルール認知タイプの効果がみられた。

多重比較の結果、個人志向性P得点では、一方的タイプよりも基本的タイプの方が高く ($p < .05$)、社会志向性P得点では一方的タイプよりも、気遣いタイプと基本的タイプの方が高い結果となった ($p < .05$)

4. 考 察

本研究の目的は、友人関係のルール認知タイプに

Table 2 ルール認知タイプの各尺度得点

	気遣い	一方的	基本的	多重比較 ($p < .05$)
個人志向性P尺度	25.07	23.40	26.00	一方的<基本的
個人志向性N尺度	17.75	19.29	18.45	—
社会志向性P尺度	33.76	30.20	33.66	一方的<気遣い, 基本的
社会志向性N尺度	23.58	23.97	23.63	—

よって、個人志向性、及び、社会志向性が異なるのかについて検討することであった。

ルール認知タイプは3つあり、個人志向性P得点と社会志向性P得点においてルール認知タイプの効果が見られた。

まずはじめに、個人志向性P得点について述べると、一方的タイプよりも基本的タイプの方が得点が高かった。このことは基本的タイプの方が自分自身の内的基準を志向し個性を発揮したり、自立や個別化に向かい主体的に行動する自己が発達していることを示す。つまり、友人として基本的な関わり方を重視し、ありのままの自分を出表することを重視する者は、友人に自分を受容してもらう行動のようなある意味では自己と友人とが未分化な存在である振る舞いがみられないために、友人と自己を区別し主体的に行動できる自己が発達するものと考えられることができる。

次に、社会志向性P得点では、基本的タイプと気遣いタイプが、一方的タイプよりも得点が高かった。このことは、基本的タイプと気遣いタイプは他者や社会との関係性に意識が向かい共存や社会適応を志向していることを示す。この結果は、一方的タイプが友人に対して自己の受け入れを一方的に示すために、友人と自己の関係性を考慮するといったことや社会的適応といった環境への調和という点で独りよがりな点が表面化していると考えられる。逆に言えば、気遣いタイプでは、気遣う振る舞いを重視するために関係性への配慮が必要になったり、基本的友人タイプでは個性化が発達しているため、自己を社会にどのように適応させていくのかといったことが理解されていたりするために、この2つのタイ

プの社会志向的な自己が発達しているのだと考えられる。

ところで、個人志向性N得点、および、社会志向性N得点においてルール認知のタイプの効果がみられなかった。このことはどのようなルール認知のタイプであっても、否定的な側面に関する自己の発達に違いがみられないことを示すと考えられる。

本研究の結果から、どのようなルール認知を持つことが自己を発達させるのかを考えたり、どのようなルール学習が自己の発達にとって好ましいのかを考えることができる。

本研究では一方的タイプは、他の2つのタイプと比較して発達の程度が低かった。つまり、友人関係において一方的なルールを持たないことによって発達の程度が高められることを示している。また、ルールは行動を統制する基準であり、簡単に変更することができないと考えるのであれば、一方的なルール認知を持つものは、自己の発達が低い状態のままであることが示唆される。そのため、自己の発達の程度を高めるためには、適切な友人関係のルールを幼少期から学んでいくことが重要であると考えられる。

ルールの因子分析結果に関しては、畠山では「親密さ」、「自己呈示」、「葛藤回避」の3因子が抽出されていた¹⁰⁾ものの、本研究では一部異なる因子が抽出された。この結果は今回の被調査者が女性のみを対象とした結果であること、あるいは、被調査者の人数が因子分析の統計的な手続きのためには最小単位の人数であることが理由としてあげられる。今後は男子を加えた分析を行うことやルール項目を精選するか、被調査者数を増やして因子の安定性を考慮

していく必要があると考えられる。

さらに、今後は男性の被調査者を加えてルール認知のタイプと個人志向性、及び、社会志向性との関連を検討する必要があるだろう。

引用文献

- 1) Blos, P "The second individuation process of adolescence", *Psychoanalytic Study of childs*, 22 (1967), p. 162-186.
- 2) Blos, P "On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation. (The Free Press of Glencoe, 1962)
- 3) 鎌幹八郎「自我同一性の危機の状態に関する臨床心理学的考察」, 『広島大学教育学部紀要 第一部』, 23 (1974), 329-342.
- 4) 伊藤美奈子「個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」, 『心理学研究』, 62 (1993), 115-122.
- 5) 伊藤美奈子「個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討」, 『心理臨床学研究』, 13 (1995), 39-47.
- 6) 松井 豊「友人関係の機能」, 斎藤耕二・菊地章夫『社会化の心理学ハンドブック』, 川島書店, 1990, 283-296.
- 7) 落合良行・佐藤有耕「青年期における友達とのつきあい方の発達的变化」, 『教育心理学研究』 44 (1996), 180-190.
- 8) 岡田 努「現代の大学生における「内省および友人関係のあり方と「対人恐怖的心性」の関係」, 『発達心理学研究』 4 (1993), 162-170.
- 9) 小塩真司「青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連」, 『教育心理学研究』 46 (1998), 280-290.
- 10) 畠山 寛「青年期の友人関係のルールに関する研究」, 『鳥取短期大学紀要』 48 (2003), 49-57.
- 11) Argyle, M., & Henderson, M. "The rules of friendship", *Journal of Social and Personal relationships*, 1 (1984), p. 211-237.